

望月正雄氏

静かな住宅地緑ヶ岡に新築された先生のアトリエがある。フランス留学から帰国後初めての訪問。心はずみですが通院治療中の僕は23回全道展目録の取材は正直に言つて重荷であった。でも、手入れされたイボタの新芽・パンジー・チューリップなど鮮やかな色彩の中にかこまれ、住宅と隣り合わせのアトリエの前に立つた時の空気うまさ。そして、ドアを開けた時絵具と油の臭が腹わたにしみわたり、重かつた心が晴々とするのはつきりと感じた。

「おじやまに来ました。」

と声をかけると

「やあ、よく来てくれたね。病気の方はどうだね？」

と先生の声がはね返つて来る。奥さんと一緒に僕の身体の事を心配して下さる。

「大作でなくても、20号位でもいいじゃないの、出品したらどう。」

「その方がかえつて君の身体にもいいんじゃないかなあ。」と励まして下さる。暖かい心に嬉しきで一杯になる。

先生御自身でよく「穴ぐら」と言われる10坪余の天井の高いアトリエの壁面には、描きかけの大作数点と凌散された時描かれて来た寺院・風景の油彩・水彩による作品・スケッチが所狭しとならべられている。その前に立てられたイーゼルには、これらの作品の「分解」・「再構成」といつたきびしい造形追求を試みていることが歴然とわかる作品数点が立てかけられている。先生は、これらの作品に雑談をされている最中にも暫々何かのひらめきを感じての鋭い視線が注がれる。その度に早く退

散しなければと追いつめられた気持になる。

以前、先生から少しお聞きしていた。「スペインの自然」と「グレンコの構図」「ピカソの色彩」との関係など民族性（気候風土）にふれる問題古典（特に深く感銘を受けたゴヤを中心に）近代（ルノアール・マチスを中心に）通してヨーロッパの作品から直接学ばれたこと、先生がよく「ヨーロッパで絵を学ぶ者はきびしいよ。」と言われるが、日本とのちがいが深くお聞きして御紹介しようと考へお訪ねしたはずなのに、久しぶりの対面で私が雑談に終始してしまいました。大変楽しいひとときでしたが、自分自身疲労に負け取材の目的を達せず、今秋東京のある画廊の御厚意で開かれる先生の『個展』の御成功を祈りつつおいとまをしました。



訪問者 川瀬敏夫



札幌の円山周辺には多くの絵かきが住んでおりそのほとんどが全道展の会員のようにだ。

大本靖氏のアトリエも円山の最も高い所に位置し、建てられてすでに3年目と言う。アトリエ開きの時版画の連中が庭でジンギスカンをつつき杯を酌み交わしたのもつい先刻のように思える。

丁度訪れた時は、全道展の招待状などのデザインをされていた、この種の仕事はお手のものであるが今はもっぱら版画制作に忙しい様子。木版画はすでに多くの人々が経験し判つていることはいえプロのそれとなると全ての点で雲泥の差がつく。デッサンはもとより、下絵から彫り、そして刷りとどの過程をとつても熟練を要する。もちろん材料の面も大きく異つてくる。氏のアトリエに入りまず目につくのはそれ等の用具がくの字型

大本靖氏

をした大きなテーブルの前に整然と並べられてある。

油彩画家のアトリエとはかなり違つた雰囲気であり、1カ所で全ての仕事をするのではなく、描く場所、彫る場所、刷る場所、紙をねかす場所とスペースはかなりとらなくてはならず、その点上手に活用されており、更に今までの作品、デッサンなど保存にも十分気を配られスクラップされておる所は氏の人格そのものであり制作態度にもうかがえる。

今の仕事は全道展の仕事もすでに終え頒布用の札幌紹介版画である。よく売れるらしい。『よく売れなくてはならないし、版画は複数であつてもあくまでもオリジナルだ。もつと大衆に愛されるべきだ』と――。

伝統のある日本の版画も一度廃れ、今また海外での版画ブームが日本に逆輸入の型で評判を出してきた。『ぜひ北海道にも版画コーナーのある店を実現したい。』と意気盛かん、共に版画をやるもの同志だけに共通の話題に落ち着いた。氏の版画歴は古く北海道ではパイオニアである。この訪問記を書いていて私が8年前油絵から版画（エッチング）を始める機縁を作つてくれたのも氏であつたことを想い出し改めて感謝したい。

訪問者 渡会純介

ア ト リ エ 訪 問

砂 田 友 治 氏

札幌でも北の住宅地、閑静で広々とした、あちこちに赤レンガのサイロもみられる、そんな所。北33条東5丁目に砂田友治氏のアトリエはある。

電話でお聞きし、日中では多忙とのことで夜8時頃のアトリエ訪問ということになった。

部屋に通されるなり「昨年アキレス腱を切り、今年になってから蓄膿症の手術をし」などと患者を病院に見舞いに来たようなことになってきましたが「そのうち「鼻を引つばがして骨をゴリゴリ削つて鼻の形が変つてしまつたんでね」「鼻の穴つてこんなにかいんですね」などと話がすつかり野獣派的になり、まるで氏がキャンパスに向つて勝負しているような様子になってきたのでやつとほつとした次第です。



岩 船 修 三 氏

ここは、宝石を散りばめた市街地をみわたす函館山の山麓、詩人石川啄木の眠る立待岬にま近く、太平洋の波瀾のきれめのない億万の揺籃のなかにある。

——黄昏せまるころ、かすみ草の咲き乱れる氏のアトリエを訪ずれる——

そこには、いつでも、ひとを慈愛にみちて抱く眠りがある。幾千人の子供と、そしてひとたちに、絵を描く楽しさを教えた掌がある。

「この春の東京の個展が終つたところで、10月の名古屋の用意だ。」という。ここには、かたつむりが這い、蟻がとび、子供がおり、子供の眠には、魚がかいまみた花園がある。

魚は生きて喰う楽しさをうたい、ロボツクルは路の下で合唱する。

せまい空が 無限の深さに遠のき
とおく ちかく かるく おもく 翔ぶ。
彩りの饗宴——。

「みるもの、すべてがテーマだ。」というあなたの視線は、すべてのものを どんらんに呑みこむのか。アトリエせましと息衝く画がある。

南側に大きな窓をとつた20畳もあろうかと思われる大きなアトリエには今年度全道展に出品するという制作中の作品が2枚、別々のイーゼルに置かれ、他の壁には所狭しと大小のデッサン、油絵がかけられている。さきほどの病気の話はこのアトリエではもう無縁である。執拗に追求された油つこい作品、作品が私の胸を打つ。

想えば私が学生の頃、油絵の先生であつた氏の裸婦をテーマにし、形がわからなくなつても、そんなことには頓着せず絵具を重ね追求された作品の印象をもつて、今このアトリエで1点1点の作品をみると、「裸婦」から「漁夫」とテーマは変つたが、一層作品の密度を増し、作品の中で力強く燃焼している。そんな氏のエネルギーシユな姿に頭の下がる思いがする。

氏はいう「僕の若い頃はうまい絵で通用した。でも現代は自分の持前が問題で、上手、下手は無関係だ、そして今の若い人達は時代に合ったテーマで上手に絵を作れるが、僕にはできない。やはり魚臭さ、北海の荒々しさを描くことしかできないのだ。だから塗つたくるだけだ。」と言われたが、その言葉が氏の制作の柱であり、あの力強い作品を生むエネルギーにつながっているのではないかと強く感じるのである。

ひとつひとつの話から深い感銘を受け時のたつとも忘れ話し込みいつの間にか11時になつてしまつたが、明日からの私の制作に励みが与えられ、「描くぞ!」と大声を出したくなるような気持になつてしまつたのだつた。

訪問者 谷 内 丞



「最近東京の友人のアトリエを改造したら私のフランス時代の作品がでて送つてきた」という40枚の絵は、30年前の作品とは思えない話しかけをする。

抽象的な描写、写実的な絵、「エッフェル塔のあるセーヌ」「パリーの街角」「古い城」「女」——。

現在の原型というには、なまなましい、歩みがある。

1日50本の喫煙をやめたという意志は、絵への執着のためなのか。

若々しい顔は、白髪に映えている。

<昭和36年、函館市の文化賞でたたえられたあなたの、とこしえの健康を折つて氏のアトリエを辞したのである——>

訪問者 長谷川 常雄

ア ト リ エ 訪 問

本郷 新 氏

● 私の本郷先生宅最初の訪問はもう10年も前のことになる。先生のお宅は世田ヶ谷区梅ヶ丘の駅からかなり入ったところの閑静な一角にあつた。初めてみるお宅は北欧的感じのあるお住いで、アトリエには「聞けわたつみの声」「母子像」などの大作の原型から、大小作品の原型が棚の上までびつりと置かれてあつた。

その日、初めての訪問にもかかわらずすっかりお邪魔してしまつた私は、梅ヶ丘の駅まで先生に送つて戴いた。時折、自動車のライトがゆるやかにアスファルトに光を投げかけ微妙な凹凸の世界をくり広げていつた。すると先生は、今とちつとも変わつておられない。ゆつくりとした、おだやかな口調でおつしやつた。「あれが彫刻というものなんだよ」私はこの時、何かばく然とした中にも、彫刻というものの中に深く無限な世界のあ



ることを感じとることができた。

本郷先生は、体当りで激しく作品にぶつかつて行かれる情熱家であられる半面、完成に近い着色した作品などをさもいとおしげに、そして如何にも楽しそうに、さすつたり無でたりされる、そんなゆつたりとした温さを持つておられる先生でもある。先生の作品は一見大まかに見えるが、微妙にかみ合つた量の中に、ひとつひとつの量への愛撫があり、限りない世界がある。私は何時も先生のアトリエに入ると、つい先生の作品にさわつてしまう。そして目を閉じ手さぐりで、その量感を楽しみ感動する。

先生のお宅にも新しいアトリエが建ち、お庭も前にくらべ、だいぶ狭くなつた。でも玄関前には、背後の大きな二つのアトリエを支えるように、セメントの力強い大作が、「がん」とすえられており、またそれとは逆に、ついその草むらの中に小さなユーモラスな首がそつとかくれているいたり、思わず手に取り上げてみたくなる自然石が置かれてあつたりする。私はそんな先生宅のお庭が大好きである。そして何時の頃からか先生宅は私にとつてもするとガサガサになりがちな東京での生活の唯一の心のうるおいの場ともなつている。

訪問者 新 国 美 津

小川原 脩 氏

札幌大丸での個展（5月18～21日）を終えて帰つたところを訪ねる。

アトリエは画歴をうかがえる古色を帯びているも、野生的で素朴な土のにおいのする馬の作品が大小重なりあつて壁に床においてあり、これから馬シリーズがつづくであろう大作のキャンバスには下塗りのライトレッドが輝く色彩で、いきいきしていた。

個展の成果はいかでしたの問いにこたえず、アトリエ訪問の企画もよいが、それ以上に考えてみるべきことがあるのだからうか。

多様な造形形態の現代に対処している情勢、環境について、それぞれのゼネレーションにある人びとの考えを問う企画をすべきでないか。

今日の美術界を展望し感じることは、すぎましい速度で変貌してゆく、あとからあとから噴出する泉のごとく新鮮なものが続いていることを、こうだときめつけるものがないとみているが、現代に生きているそれぞれがどううけとめて主体性を持つているだろうか。が課題の中心であつた。

東美卒いらいなが東京での生活から、現在倶知安という片田舎で制作の根拠を持つていること、創作にどう有利か、個人の思考によるが、年に数回の上京や、個展、毎週札幌の大学での講座、都会と田舎の空気のをそれぞれ吸収し、つまりゆ



く道の自己の主体性を堅持しているからであろう。

批判的精神が旺盛し、制作信念に生きていることの教示をうけて小雨のふるなかを酔した。

訪問者 谷 口 一 芳